

## 第四章 念仏即大慈悲

### 第一節 聖道の慈悲

一。慈悲に聖道浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。

### 第二節 浄土の慈悲

また浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏になりて、大慈悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。

### 第三節 念仏即大慈悲

今生に、いかにいとほし、不便<sup>ふびん</sup>とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏まをすのみぞすゑとほりたる大慈悲心にてさふらふべきと云々。

### 念仏即生活

第四章以下においては、聖人が、念仏と生活との交渉をいかに考えておいでになつたかを示されたのであります。すなわち

### 第四章 念仏即大慈悲

### 第五章 念仏即孝道

### 第六章 念仏即師弟道

と、三章にわたつて、われらの生活と、念仏道との関係をお示し下さつたのであります。慈悲と、孝道と、師弟道とは、人生生活の基調となるものであります。

第四章においては、念仏道が未通りたる大慈悲であること。第五章においては、念仏申すことが子としては真の孝道であり、親としては真の親の道であること。第六章においては、念仏が、師の道であり、弟子の道であることを示されたのであります。

これに準じていただければ、念仏は、真の夫婦道を成就し、真の兄弟の友を成就し、真の朋友相信の道を成就するなど、人生の一切の道は、念仏道の成就によつて、本質的に成就することを示されたものといたばかりでありません。これまぎしく、「信一元の生活」を高調せられたものであります。以下順を追うて頂戴してまいります。

### 第一節 聖道の慈悲

「慈悲に聖道浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。」

聖人はまず、人生生活の根底であるところの慈悲について、これを聖道の慈悲と、浄土の慈悲との二つに分類せられました。しかしてまず聖道の慈悲を示されます。すなわち、

「ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。」

「もの」とは衆生のこと、「あはれみ」とは慈悲の慈で、「かなしみ」とは慈悲の悲であり、「はぐくむ」とは「育む」で、そだてることでもあります。すなわち、慈悲の心、抜苦与樂の心で衆生をはぐくむことであります。自らの力で、他の衆生をあわれみ、それによって、衆生の運命を育ててやる、それはまことに、いちおうりっぱなことであります。困った者に衣食住を施したり、行きづまった人を救ったり、悪人を善人に教化したり、まことにみな結構なことでもあります。世間に考えられていることの大部分は、この聖道の慈悲であります。

しかるに、聖人は「しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。」と、この聖道の慈悲に、深い内省の感慨を示されたのであります。

自己の行為を肯定したい自分免許の善人意識のものにとつては、この聖人のおことばはまことに、なんだか消極的な、つまらない弱者の声のように聞えるであります。しかしつきつめて自分を視、世の真相を知るものにとつては、まことにこの一語の真実であることを知らせていただくことであります。

## 第二節 浄土の慈悲

聖道の慈悲に行きつまった聖人は、しかしそこに止っていられたのではないのであります。聖道の慈悲に行きつまったところに開いてきたのが浄土の慈悲の天地であります。

「また浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。」

浄土の慈悲とは、本願力の廻向によつて、利他よりも先に自利成就して、その自利成就を通して利他を成就しようとすることであります。すなわち、念仏してとは、真実の教えによつて名号を聞信するところ、やがて真実の証果を成就するのであります。すなわち真実の教行信証によつて私自身が助かること、その自利成就を先にして、やがて自利成就の極、仏のさとりを開いてから衆生済度をさせていただく、それがすなわち浄土の慈悲であります。

これは、念仏を信ぜない人にとつては、なんといなまぬるいことであろうかと思われるのであります。誰も彼も、「今すぐに善を行え、誰にでもできる」とこのように思い、それが限りなく可能であるかのごとく思っているからであります。われらは、今少し静かに聖人のお声を聞きましょう。

## 第三節 念仏即大慈悲

「今生にいかんといはし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏まをすのみぞ、すゑとほりたる大慈悲にてさふらぶべきと云々。」

理由

この聖人のみ言をいただきつつ思われることでありますが、かかる浄土の慈悲をもつて生ぬるく感ぜられ、今直ちに、慈悲が十分に行ぜられると思うている人には、次のようなことが考えられているのでありましょう。

その第一は、「おもふがごとく、たすけとぐること、きはめてありがたし」でなくて、自分には思うがごとく、ものをあわれみかなしみ育むことができる。思うがままに慈悲を行ずることができると思う心を持つているのであります。

人間はだれでも善いことをする。寒さに凍え食に飢えていれば、一椀の食を与え、できるだけの布施をする。しかしそこに一つの問題がひそんでいます。そうしたことの二つができる、すぐ自分は慈悲が行じられたと、自慰安心に入るか、もつともつと深くわれと相手との真の相を見てゆくかどうかであります。

私は聖人の「ものをあはれみ、かなしみ、はぐくみ」たもう心が、浄土の慈悲にまで転廻していったところには、聖人のお心には、焼けつくような人類愛のころ、衆生縁の慈悲が動いていたことをし。憫ぶものであります。「いとほし、不便とおもふ」ころが、どれだけ深かったことか。しかしそれと同時にそこには鋭い智慧が光つていて、人間の慈悲に深い反省をせしめずにはおかなかつたのであります。

「おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし」でなしに、たすけとぐることは容易であると思う心、それはご本人にはほんやりしたことでも、しかし強く心の底に動いています。それが人間の「が我」であります。そもそも「いかにいとほし、不便とおもふとも」と仰せられますが、私どもには、第一にかくのごとき人類に対する、衆生に対する熱愛がないのであります。貪欲の心の持主には、衆生においてする慈悲はない。しかるにそれに対する内省を持っていないで、慈悲のころの有る無しさえ見つめずにおいて、慈悲の行はできると考えておるのであります。

静かに静かに沈思かんがえれば、はたして一度でも、真愛を成就したことがあります。私が愛したとは傷つけたことではありません。愛着したことがあります。一切衆生どころか、私に近い者たちすら、一人として真に愛したことはないではないか。得手勝手えてかな愛である。醜い心である。たとい愛憎を超えて、「いとほし、不便とおもふとも」それは水に描ける絵のごとく、またたく間に曇ってしまう。「この慈悲始終なし」初めあつて終を貫かぬ、仮にすぎませぬ。仮すなわち、かりの真実は、結局虚しきものであります。虚仮の真実を見つめて「この慈悲始終なし」と仰せられるのであります。

愛し得るものを愛して、憎むものを憎む。それは一切の凡夫の現実のすがたであります。しかるに真実愛を求める心は、必ず自らの愛憎の心の醜さを知り、一切の人を愛しきろう、憎むもの嫌な者を愛しきろうとします。しかしそうした悲痛な努力、愛は悲痛な努力でありますが、かかる努力によつて、真愛を成就しようとしたものだけに、愛に対する破産があります。ましてや、大乘の菩薩は、一切衆生に対する愛執を棄て、憎悪を超えて「衆生無辺誓願度」と、その憎悪、悪罵の毒を甘受しつつ衆生を救いきることによつて、自らの証果を成就すると説かれます。かかる高き規範の前に立った時、なんで自らを、慈悲心ありと言われましょう。自らに慈悲ありと思うがごときは、自己を照らす標準が極めて低いがゆえであります。

かくまでつきつめて自己を凝視したことも、内観深信することもなくして、高上りした聖道の機のまま、しかも他力の世界につれ出されたのが私であります。したがって、この慈悲の問題をこの『歎異鈔』の御文のごとく体解して、大法の園に入るのではありません。ただ念仏の広大さが知れるにしたがつて如来の智慧光に照破せられ、わが機の真相と人生そのものの真相がほのかに見えそめるにしたがつて、はじめてこの聖人のご信境をうなずかせていただくことであります。

### 念仏即大慈悲

「しかれば、念仏まをすのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にてさふらふべきと云々。」  
「念仏まをすのみぞ末通りたる大慈悲」であるとは、まことにまことにありがたいことであります。

私どもは、まことにこのみ言の真実にてましますことを、昼も夜も昨日も今日も事実の上に拝ませていただくことであります。その思いの一つ二つを申させていただきます。

前に申しましたように、慈悲を聖道の慈悲と浄土の慈悲とに分け、「また浄土の慈悲といふは念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふのごとく、衆生を利益するをいふべきなり。」と仰せられました。この文を伺いますと、「念仏して仏になる」ということがその中心となつていようであります。念仏していそぎ仏になるとは、如来の本願によるとはいへ、自己を成就させていただくことであります。自利成就させていただくことであります。私はここで、天親論主の「願作仏心」と仰せになつたみ言を思い出させていただくことであります。信心とは、願作仏心であります。信心は成仏への願心であります。「念仏して仏になる心」であります。したがって浄土の真宗は、仏の利他の大悲によつて、自利成就することを先とするのであります。聖道が利他を先にして自利成就を後にするのに反して、自利成就を先とするのが念仏の世界であります。しからば何ゆえに、

「しかれば念仏まをすのみそすゑとほりたる大慈悲」

と仰せられるのでありましようか。それは、願作仏心がそのまま度衆生心だからであります。私たちは考えねばなりません。自利成就すなわち、自己自身の問題をぬきにしての慈悲、譬えば悪党の慈善事業のごときもの、それがはたして慈悲であるか。浄土の慈悲とは、末の問題を本にもどして、まず汝自身を成就するということから出発するのではあるまいか。

### 自利利他一如

そもそも南無阿彌陀仏は、如来の正覚自利と、衆生往生の利他と一如に、また、往相還相の二廻向を一南無阿彌陀仏の名号の内容として成就して下さつたものでありまして、自利をはなれて利他なく、利他をはなれて自利なき、全く自利利他一如に成就せられたのが如来の名号功德であります。でありますから、この本願の名号によつて自利成就することはそのままが、末通りたる慈悲を任運自然に成就させて下さることになつているのであります。

口さがない童が「寺の坊さん石橋土橋、人を渡してわが落ちる」と戯れています。しかしほんとうは「人も渡さずわも落ちる」というのがほんとうでありましょう。山の大木は、その自らを成長させただけが人のためになっています。植えた桜には、彼が美しい花を咲かせてくれる以外に、その栽培の謝礼を求めは致しません。太陽は自ら輝いて、利他を語らないが、その存在自身が利他であります。自らが真暗で人を照らすわけにはいけません。自らは真暗な闇の中におり、あるいは有るか無しかの豆電燈では、行く手はるかなる自らの道さえどうすることもできません。いわんや他人をやであります。自らは、貪瞋痴の三毒に焼けただれていて、他を救う慈悲があるなどと考えていることが大間違いであります。

親鸞聖人は、衆生を助けるの、慈善を行じ得るのと考えないで、自らを成就する願往生の一筋道を急がれました。しかして「小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもふまじ 如来の願船いまさずば 苦海をいかでかわたるべき」と仰せられつつ念仏の一道を歩み続けられた。にもかかわらず七百年の間、億々の衆生は助けられて、現在ましますきん熾にその化導によって助けられております。聖人こそは、身をもつて「念仏まをすのみぞすゑとほりたる大慈悲にてさふらふ」ことをお示し下さったのであります。それは、聖人の念仏の行歩を通して、本仏の大慈悲が暗の生死海に輝いて下さったのであります。

見よ、この村にあの里に、一もと、二もと念仏に生ききつた同胞は、自分では悪人と大地に合掌しているのに、不知不識の間に、村を里を照らす人の世の燈明台となつているではありませんか。その家に、如来の大慈悲がつつぎと流れて、真俗双美の5尊さを顕現しているではないか。念仏はすでにこの世から、如来の慈悲に輝いております。

人生では所詮、因の相より許されません。この世で活動しているものからは全て因の相であります。念仏の行者もまた、正定聚不退の因位の相であります。「仏になりて」からのことは何うにも由もないことではありますが、仏へと不退転に行歩する念仏者こそ、末通りたる大慈悲であるとはいただくべきであります。